

石川佳純  
Ishikawa Kasumi  
(全農)



重圧の中臨んだ、  
今年初となる大会・全日本選手権。  
前回覇者の石川は、  
何を得たのだろうか。

2014年末、タイで行われたITTFグランドファイナルにおいて日本女子選手として初の優勝を達成。石川にとって素晴らしい1年になった。年明け、ITTFから発表された世界ランキングは自身最高となる4位にランクされた。

全日本直前、福原愛(ANA)が故障のため棄権と発表された。これで女子優勝は石川、と決まった。1年前の全日本とは、明らかに周囲の目が違った。

若手が台頭した今回の全日本だったが、石川はシングルス、ダブルス、混合ダブルスに優勝。

女子では54大会ぶり史上2人目となる3種目制覇を達成した。世界ランク4位に恥じないプレーをみせたが、優勝までの道のりは険しかった。

迎えた2014年。石川は、全日本選手権大会で3年ぶり2度目の優勝を遂げ、また大きな経験をえた。

世界選手権東京大会の準々決勝オランダ戦のラスト、準決勝の香港戦のラスト、アジア競技大会のシンガポール戦のラストで勝利。また、グランドファイナルでは初優勝を果たした。

「緊張した場面や勝たなければいけない場面です。でも勝つことができました。自分にとっては大きな勝利だったと思います。」

また、今の自分と1年前の自分では、はるかに違うことがわかります」と分析。では何が違うのか。

「何が変わったのか、と言われるとどう答えていいかわからないですが、苦しい試合を経験して勝つことができました。多くの経験を積むことができたと思います。」

もちろん今でも苦しい展開になって、まずいな、と思う時もあります。簡単に負けられない、と前より思えるようになりました。」

コートになつて1年半。陳怡チは「勝たなければいけない場面や勝つことができた。いい試合をして勝てた。選手としてこれ以上大きな経験はないと思います。」

勝負への執着心が生まれ、それが粘り強さにつながっていると思います」と石川の成長を認める。

世界の頂点に向けて

普段は、男子ナショナルチームの合宿に混じり、練習を積む。男子とやるようになって全体的なレベルアップを実感しているという。

「男子との練習では、甘いボールを打つてしまふと、一発で打たれてしまいます。最近では、体が自然と意識できるようになり、前より厳しく、鋭いボールが打てるようになってきていると思います。相手の強打に対しての恐怖心も

なくなってきたと思いますので、全体的にレベルアップしていると思います」と充実した表情で話してくれた。

4月末から中国・蘇州で世界選手権が開催される。

「14歳のときから世界選手権に出場させてもらっていて、良い経験ができていると思います。」

世界選手権には今年で9回目の出場になりますが、回数だけで言えばベテランだと思えます。

ただ、世界選手権は全日本選手権とはまた違う心境で思いつつ挑戦できると思います。上位に進出するには、中国選手を含めた強い選手に勝たなければいけないと思うので攻めのプレーで、向かっていきたい」と力強い抱負。

世界ランク4位。自身最高位をマーク、もちろん日本選手権最上位となる。「世界ランキング4位になったことは嬉しいです。でもあまり気にしていません。今は、世界選手権、リオ五輪、東京五輪に向けて実力をつけていくだけです。ここからが勝負で、ここから強くなるのが難しいことは自分でもわかっています。ここからが本当の勝負になると思います。」

とそれまでの笑顔から一転、力強い眼差しで答えてくれた。練習中や試合以外では、いつも笑顔で明るく応える。しかし、こと卓球の話になると、笑顔の表情から毅然とした表情に変わり、目標を話してくれた。

「本気で中国に勝ちたい。中国が相手だからといって負けるのは悔しい。この悔しさを忘れず、もっとレベルアップをします。」と、取材後、レコーターが回っていない時に話してくれた。それがアスリート石川の本音だろう。

プレーすることができていました。ですから、8-9で攻める気持ちでフリックレシーブをすることができました。苦しい経験があったからこそ、あの場面で大大会一番のプレーが出せたと思います。」

9-9に追いつきサービスは石川。バックに長めのサービスが効果的と判断し、勇気を出してトス。見事に決まり決勝進出を果たした。

決勝には、同級生の森園美咲(日立化成)が勝ち上がってきた。第1ゲームこそ落とし、続く4ゲームを連取し、2年連続3回目の皇后杯を獲得することにも、昭和35年の山泉和子以来54大会ぶりに3冠王選手が誕生した。

「本当にながい長い1週間でした。ほんとに疲れました。」

プレッシャーから解放された石川。瞳には涙があふれ、安堵の表情を浮かべながら、次のように話した。

「今大会、決勝以外は全員年下の対戦となりました。ある程度予想はしていました。が、想像以上に相手が強かったです。キツかったです。それだけ周りの人に認められているということになりますし、良い経験になりました。」

ますます若手の台頭が予想される女子卓球界。チャンピオンとしての苦悩は今後も続くだろう。

だが、それを跳ね返すメンタルの強さと身体の強さに更に磨きがかかれば、長く石川時代が続くだろう。

去年の積み重ねがあるから  
今がある

2013年世界選手権バリ大会が終了した。石川は、元中国代表選手の陳莉莉さんと新コーチとして迎えた。

2回戦で横山・土田組に大苦戦した混合ダブルス。女子ダブルス決勝は、阿部森園の若手ペアに攻められた。しかし、両種目に優勝した。

女子シングルス準決勝は、高校生・前田美優(希望が丘)との対戦となった。同戦型の前田を意識し、左利きのトレーナーを準備、対策を練った。

ゲームは、硬さが見える石川に対し、積極的にバックから攻めるプレーでペースを掴んだ前田が3-1とリードすると会場がざわめきだした。だが、ここから石川が本来の切れ味鋭いプレーを見せてゲーム連取。3-3に戻した。

「つなると百戦連覇の石川に軍配が上がるか、と予想された。」

最終ゲーム。後がなくなった前田が再び猛攻。前田エッジで5-4とリードしチェンジコート。再び会場がざわめく。

6-6、7-7、8-8「進一退。だが、ラリーでポイントあげ前田が9-8とリード。石川大ピンチ。このとき石川敗れる、と感じた観衆は少なくなかったかも……。」

サービス前田、石川レシーブ。「ここで、このときの一本が今大会一番のプレーでした、と石川。」

「8-8になったときのレシーブをツッツキで返し、そのボールを先に攻められて、ラリーになり失点しました。ここで8-9となりました。今までの自分であれば、もう「回ツッツキのレシーブをしてしまい負けていたと思います。」

でも去年1年間、苦しい試合をたくさん経験することができていたので、戦術の幅が増えたというか、競った場面でも落ち着いて